三重県埋蔵文化財調査報告166－4

久七屋敷遺跡・日向長通り遺跡

― 三重県度会郡度会町所在 ―

1999・3

三重県埋蔵文化財センター

序

このたび、県営中山間地域総合整備事業に伴い消滅していく遺跡の一部を発掘調査いたしました。

ご存じのようにこの地域は、一之瀬川流域の河岸段丘の地で、生活のための立地条件に恵まれています。また、一之瀬城跡や熊野脇街道などの歴史的遺産が存在しており、郷土の歴史を究明するうえで重要な地域となっております。

このたびの調査の結果を概観いたしますと、久七屋敷遺跡からは室町時代の掘立柱建物が、日向長通り遺跡からは石列のある土坑が発見され、この地域の沿革を追究するうえからも貴重な資料になると考えられます。この発掘調査の成果が消滅した遺跡に代わり、郷土の歴史ひいては文化を伝え、活用されていくことを切望いたします。

なお、文末ながら、協議から発掘調査にかけて多大のご理解とご協力をいただいた県農林水産部ならびに伊勢農林水産事務所、度会町教育委員会をはじめ、発掘調査にご助力をいただいた地元の方々に心より感謝申し上げます。

平成11年３月

三重県埋蔵文化財センター
所　長　　大　井　與　生

例　　言

1．本書は、三重県度会郡度会町五ケ町に所在する久七屋敷（きゅうひちやしき）遺跡の発掘調査結果と、三重県度会郡度会町日向に所在する日向長通（ひなたながどお）り遺跡の立会調査結果をまとめたものである。

2．本調査は、三重県教育委員会が三重県農林水産部より執行委任を受けて、平成９年度県営中山間地域総合整備事業に伴って実施した。調査費用は、その一部を国庫補助金を受けて三重県教育委員会が、他を三重県農林水産部が負担した。

3．調査は、下記の体制で行った。

調　査　主　体　　三重県教育委員会
調　査　担　当　　三重県埋蔵文化財センター（調査第一課）
主幹兼調査第一課長　吉水康夫
主査兼調査第一課第一係長　清水正明
主　事　奥野　実
主　事　松本美先
調　査　期　間　　平成９年11月17日～平成10年１月16日（久七屋敷遺跡）
平成10年１月７日～平成10年１月14日（日向長通り遺跡）

4．調査にあたっては、三重県農林水産部農地整備課、伊勢農林水産事務所、度会町教育委員会、および地元の方々のご協力を得た。

5．本書作成のための整理作業および、実測、トレースは調査担当者の他に管理指導課が行った。

6．本書の執筆・編集および遺物写真撮影は、奥野が担当した。

7．本書で示す方位はすべて真北を用いた。なお、磁北は西偏６°20′（平成２年４月）である。

8．本書で用いた遺構表示略記号は、下記のとおりである。

ＳＢ：掘立柱建物　　ＳＫ：土坑　　Ｐ：柱穴、小穴

9．本書で報告した記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

10．写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応させてある。

11．スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

久七屋敷遺跡
Ⅰ．前　言……1
　1．調査の契機
　2．調査の経緯
　　調査の行程、調査の方法、文化財保護法に関する諸通知
Ⅱ．位置と環境……2
Ⅲ．層位と遺構……7
Ⅳ．遺　物……8
Ⅴ．結　語……9
日向長通り遺跡
Ⅰ．前　言……12
Ⅱ．層位と遺構……13
Ⅲ．遺　物……14
Ⅳ．結　語……16

挿図目次

第１図　久七屋敷遺跡・遺跡位置図……3
第２図　久七屋敷遺跡・遺跡地形図……4
第３図　久七屋敷遺跡調査区位置図……4
第４図　久七屋敷遺跡調査区遺構平面図……5
第５図　久七屋敷遺跡調査区土層断面図……6
第６図　久七屋敷遺跡ＳＢ１、ＳＢ２実測図……7
第７図　久七屋敷遺跡出土遺物実測図……8
第８図　日向長通り遺跡・遺跡位置図……12
第９図　日向長通り遺跡調査区位置図……13
第10図　日向長通り遺跡調査区遺構平面図及び調査区土層断面図……14
第11図　日向長通り遺跡ＳＫ１実測図……15
第12図　日向長通り遺跡出土遺物実測図……15

表 目 次

第１表　久七屋敷遺跡出土遺物観察表……9
第２表　日向長通り遺跡出土遺物観察表……15

図版目次

図版１　久七屋敷遺跡調査区全景（西から）……10
　　久七屋敷遺跡ＳＢ１（北から）……10
図版２　久七屋敷遺跡ＳＢ２（西から）……11
　　久七屋敷遺跡出土遺物……11
図版３　日向長通り遺跡調査区全景（東から）……17
　　日向長通り遺跡ＳＫ１（東から）……17
図版４　日向長通り遺跡作業風景（南東から）……18
　　日向長通り遺跡出土遺物……18

度会郡度会町五ヶ町　久七屋敷遺跡

Ⅰ．前　　言

1．調査の契機

今回の発掘調査は、平成９年度県営中山間地域総合整備事業（小川郷上地区）に伴い実施された。久七屋敷遺跡は、度会郡度会町五ケ町字久七屋敷に所在し、平成８年の皇學館大學考古学研究会の分布調査によって発見された。調査に先立ち平成９年10月に試掘調査を実施した。その結果、事業予定地の約3,400㎡については遺跡が存在する事が確認された。

これを受けて、県農林水産部と文化財保護の協議を重ねた。その結果、ほ場整備事業のために削平される部分について、本調査を実施した。

2．調査の経緯

(1) 調査の行程

調査期間は平成９年11月17日～平成10年１月16日で、調査面積は1,500㎡である。調査に当たっては、地元地区在住の方々に補助していただいた。記して感謝します。

伊藤満子、浦井郁枝、浦井貞蔵、岡谷實子、岡谷せき、岡出秋美、岡山せき、岡山成子、岡山好子、坂井忠子、坂井よね、鈴木てい、中井鈴子、中川佳津、中川美幸、中西キミ子、中西ちず、中野淑子、西山せつ、西山孝、橋本志津代、橋本秀夫、橋本みね、服部シゲノ。

(ア) 調査日誌抄

11月18日　重機による表土掘削開始。
11月20日　表土掘削終了。
11月25日　作業開始。Ａ地区の検出、掘削。
11月27日　Ｂ地区の検出、掘削。
11月28日　Ｃ・Ｄ地区の検出、掘削。
12月２日　Ａ・Ｂ地区の再検出。
12月３日　土層断面図作成開始。
12月４日　ＳＢ１・２の１／20の図面作成。
12月５日　土層断面図作成終了。
12月10日　発掘用具片付け。作業員終了。スカイマスターにより遺構写真撮影。
12月11日　遺構平面図作成開始。
12月12日　遺構平面図作成終了。
12月15日　遺構レベル測定。

(2) 調査の方法

(ア) 調査区の設定について

調査区は、面工事で削平される部分をＡ地区、水路工事のために削平される部分をＢ地区、Ａ地区の東方の面工事で削平される部分をＣ地区、Ａ地区の南東方の水路工事のために削平される部分をＤ地区とした。そして、調査区内を４ｍ四方の升目で区切り小地区を設定した。西から東へＡ～Ｍ、北から南へ１～18を配置した。なお、この地区設定は、国土座標とは無関係である。

(イ) 遺構図面について

調査区全体の平面図は、平板測量により縮尺１／100で作成した。ＳＢ１・２の遺構平面図と各土層断面図は縮尺１／20で作成した。

(ウ) 掘削について

掘削方法は表土・耕作土を重機で、包含層以下・遺構までを人力で行った。

(3) 文化財保護法に関する諸通知

文化財保護法（以下、法）等にかかる諸通知は

以下により文化庁長官等あてに行っている。

・法第57条の3第1項（文化庁長官あて）
平成9年11月6日付農振第1505号（県知事通知）

・法第98条の2第1項（文化庁長官あて）
平成9年12月2日付教文第1768号（県教育長通知）

・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（伊勢警察署長あて）
平成10年3月3日付教文第6－95号（県教育長通知）

II. 位置と環境

久七屋敷遺跡（1）は、一之瀬川下流左岸の河岸段丘上に立地する。標高は約48mで、現況は水田である[①]。

ここでは今回の調査に関連する一之瀬川流域の歴史時代の遺跡について概述してみる。

現在、一之瀬川流域で確認されている歴史時代の遺跡は、53ケ所である[②]。しかし、飛鳥時代から平安時代の時期に該当する遺構・遺物は、確認されていない。

中世には「小河生鮎御薗」[③]、「柑子御薗」[④]、「一瀬御薗」[⑤]、「木越御薗」[⑥]の伊勢神宮領の所在が知られている。南北朝時代に入り、愛洲氏が城主の一之瀬城に宗良親王が滞在したことが知られている。その後北畠氏の支配となった。戦国時代は蒲生氏郷・牧村利貞・稲葉蔵人道通の所領に属した。江戸時代に入っては、紀州藩領となった。また、当時の当地域の主要道であった熊野脇街道（南島街道）は、現在の県道伊勢南島線に沿って通っていた[⑦]。

以下、各地区ごとに主な遺跡について見ていきたい。

南中村地区の日部経塚（2）には「一字一石塔」銘のある石塔が残り天和年間の造営と思われる。次に脇出地区では、一之瀬城跡（3）が脇出集落の中央、標高187mの独立丘陵に築城され、北側と西側に空堀をめぐらした6mの台状郭を中心に、北側と南側に二条の堀切りが残っている[⑧]。青木山城跡（4）は、一之瀬城跡の西方400mの青木山の尾根頂部に築かれ、丘陵頂部の約15m四方の郭を中心に西側に6本の堀切りがあり、東側には階段状の小郭が数箇所連なっている[⑨]。御所裏遺跡（5）からは土坑3基などが検出され、15世紀末から16世紀前半の土師器小皿・皿・鍋、天目茶椀などが出土している[⑩]。和井野地区の城ノ前遺跡（6）では、遺構は確認されなかったが、土師器鍋や陶器椀などが出土した[⑪]。火打石地区の登り遺跡（7）からは、16世紀末頃の掘立柱建物1棟や井戸1基・土坑数基が確認され、瀬戸大窯期の陶器が多数出土した[⑫]。日向地区の番場城跡（8）は小原集落南方の標高200mの山頂付近の山復に築かれ、一之瀬城と五ヶ所城を結ぶ狼煙場と言われている[⑬]。川口地区の五輪堂遺跡（9）は中世に栄えた蓮華寺の末寺、古利寺の境内の一部と考えられる。また、五輪堂の周辺に五輪塔が散乱し、古瀬戸瓶子3点が発見されたことにより中世墓の存在も考えられる[⑭]。

以上のように、遺跡は現在の各大字ごとに存在しており、現在の集落の範囲と重なっているものもあると思われる。当遺跡周辺では、中世以来連綿と集落が営まれてきたと考えられる。

〔註〕

① 皇學館大學考古学研究会編『一之瀬川流域の遺跡』（皇學館大學考古学研究会、1996年）。
上記文献では、「ゼ屋敷遺跡」と紹介されているが、字名が誤っており、今回の調査にあたり「久七屋敷遺跡」と改称した。

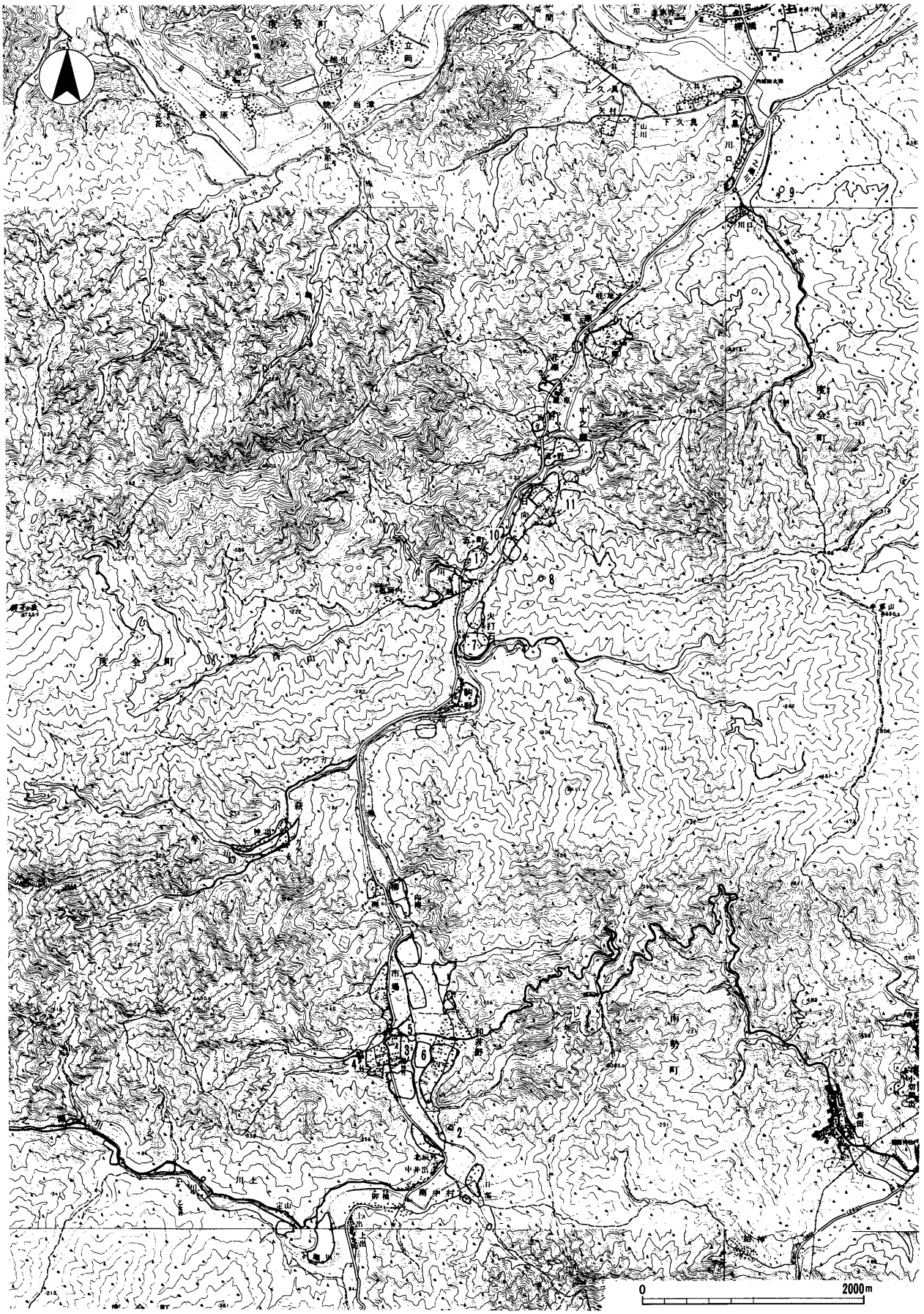
② 平成9年の試掘調査の結果、宮ノ前遺跡（10）、新外遺跡〔旧称高岡A遺跡〕（11）の事業対象地からは遺構、遺物とも検出されなかった。

③ 『神鳳鈔』（群書類従本）。

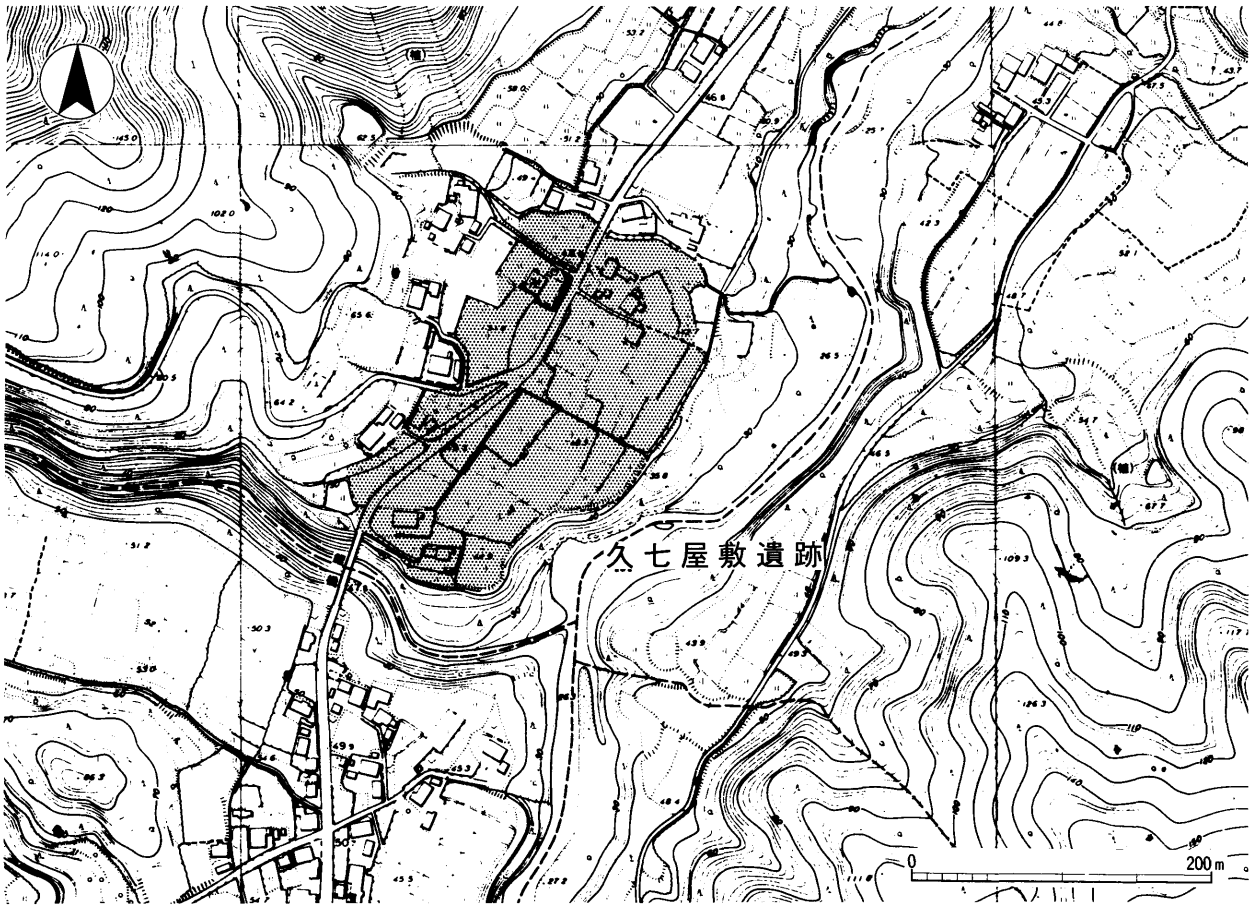
④ 前掲③と同じ。

⑤ 前掲③と同じ。

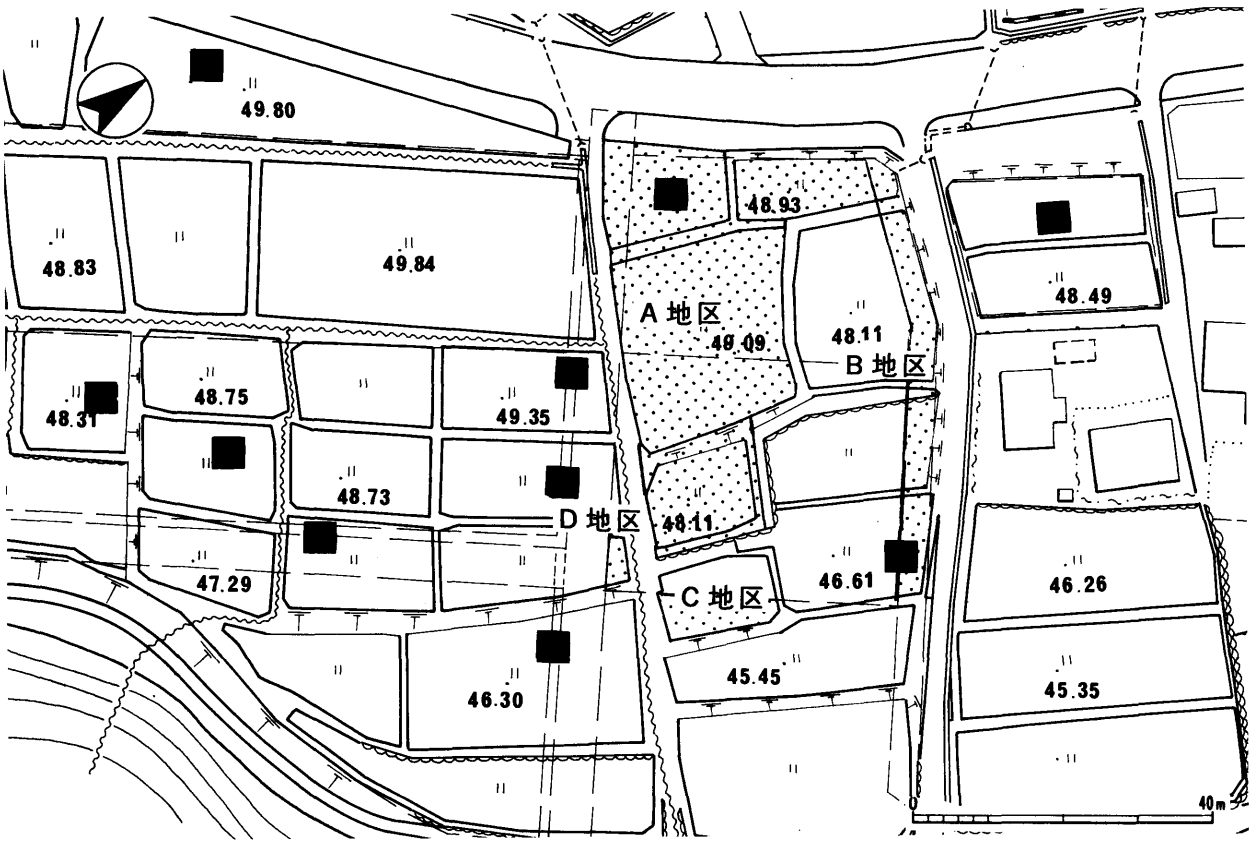
⑥ 「二所太神宮神主解案」『鎌倉遺文』812号。



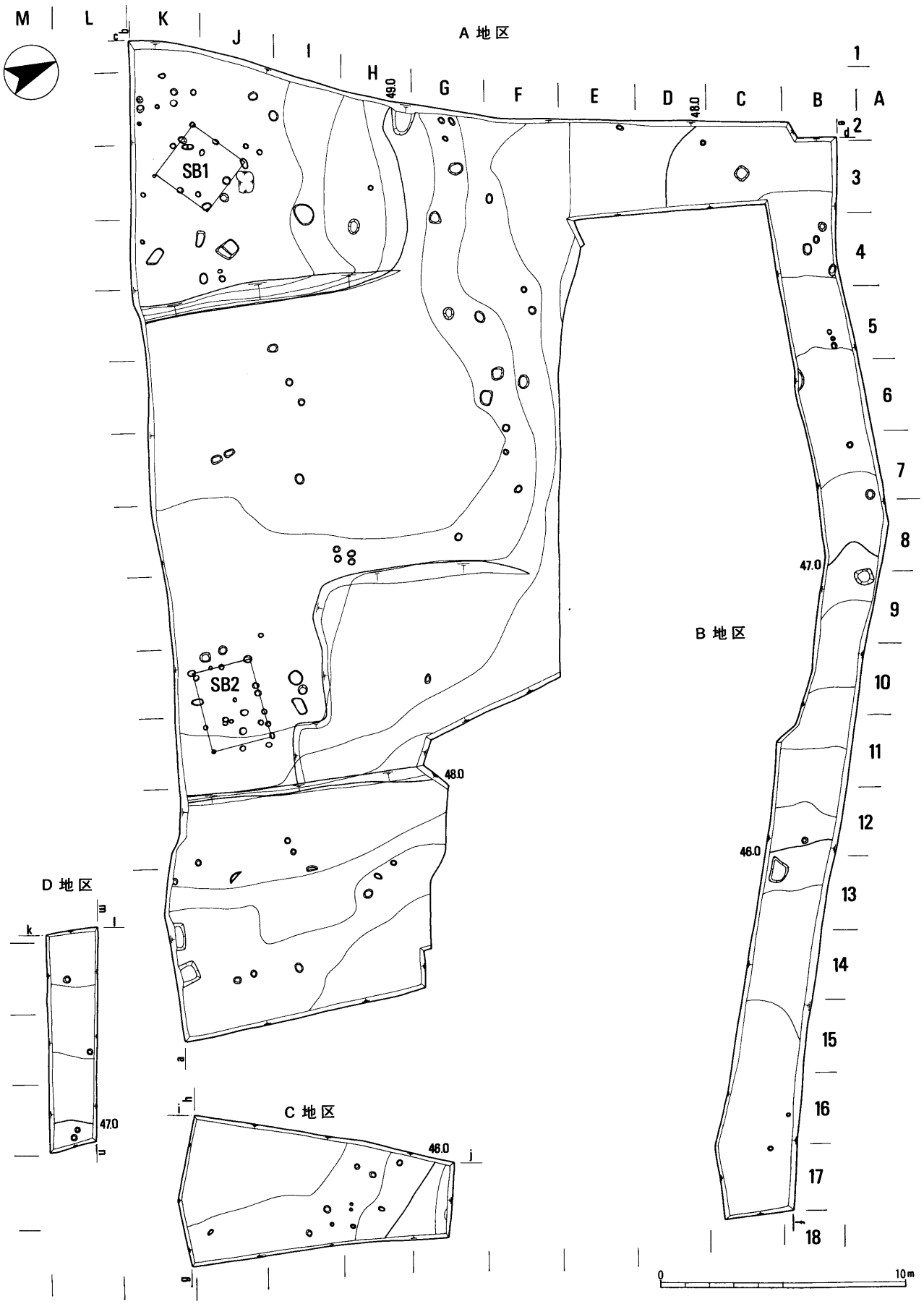
第１図　遺跡位置図（1:50,000、国土地理院『国東山』『脇出』『贄浦』『伊勢』『五ヶ所浦』『相賀浦』1:25,000から）



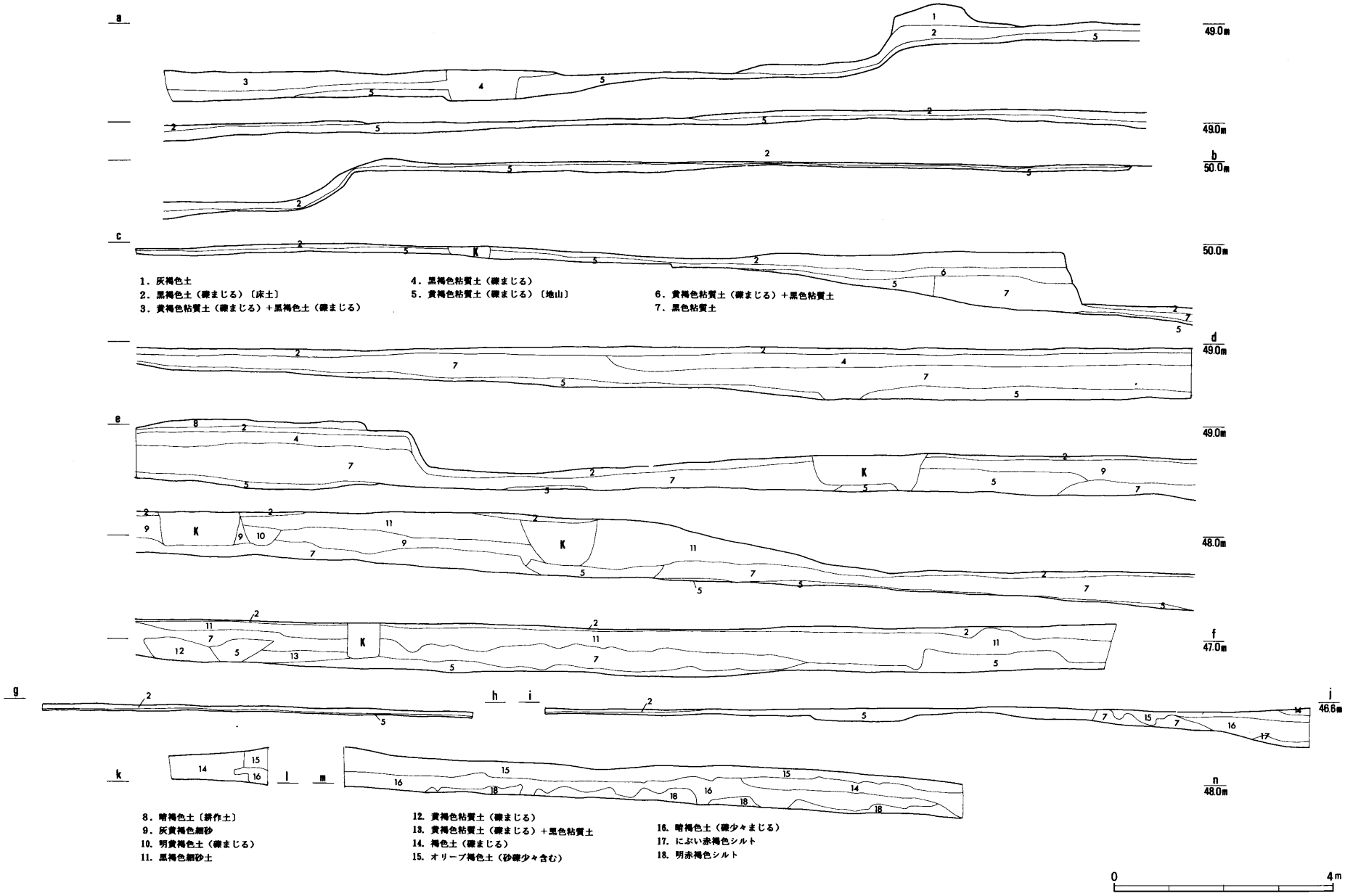
第2図　遺跡地形図（1:5,000）



第3図　調査区位置図（1:1,000）〔■試掘坑〕



第４図　調査区遺構平面図（1:300）



第５図　調査区土層断面図（1:100）

⑦　三重県教育委員会『歴史の道調査報告書5 —熊野街道—』（1981年）。
⑧　『日本城郭大系第10巻　三重・奈良・和歌山』（新人物往来社、1980年）。
⑨　前掲⑧と同じ。
⑩　小林秀「御所裏遺跡」（『平成２年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財調査報告－第１分冊－』、三重県埋蔵文化財センター、1991年）。
⑪　竹内英昭「城ノ前遺跡」（『六地蔵Ａ遺跡・六地蔵Ｂ遺跡高塚宅跡・東川遺跡〔付編〕平成５年度農業基盤整備事業地域立会調査遺跡』）、三重県埋蔵文化財センター、1994年）。
⑫　三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財年報８』（1997年）。
⑬　三重県教育委員会『三重の中世城館』（1976年）。
⑭　度会町史編纂委員会編『度会町史』（度会町役場、1981年）。

Ⅲ．層位と遺構

１．層　　位

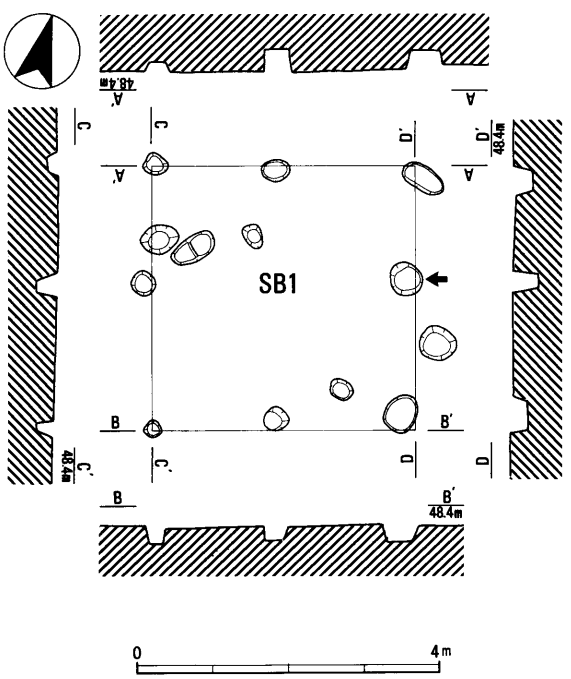
基本層序は、上より第１層：暗褐色土（耕作土）、第２層：黒褐色土礫まじる（床土）、第３層：黄褐色粘質土礫まじる（地山）となる。遺構検出面は第３層上面である。

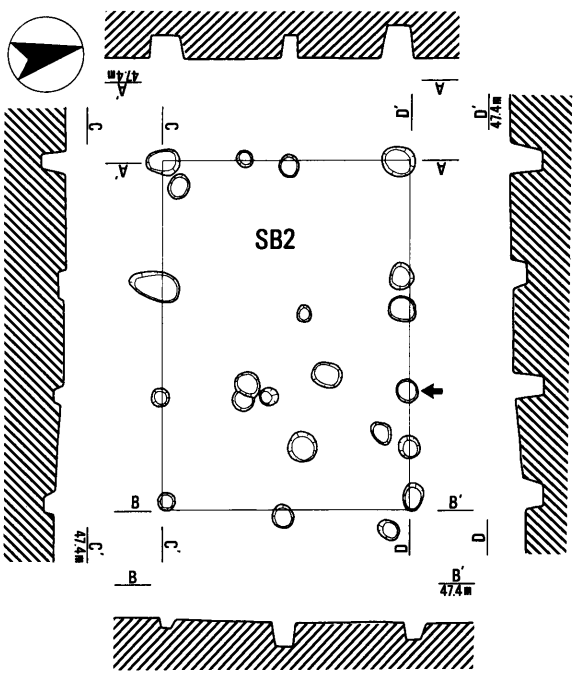
２．遺　　構

当遺跡では、掘立柱建物２棟を検出した。

(1)　室町時代の遺構（15世紀～16世紀前半）

(ア)　掘立柱建物





第６図　ＳＢ１、ＳＢ２実測図（1:100）

ＳＢ１（第６図）

調査区Ａ地区の西端において検出した。東西棟の建物跡とすると、棟方向はＮ77°Ｅとなる。桁行２

間（約3.5m）、梁行２間（約3.5m）の建物跡である。矢印の柱穴の掘り方埋土より土師器皿が出土した。

ＳＢ２（第６図）

調査区Ａ地区の中央部において検出した。東西棟の建物跡で、棟方向はＮ80°Ｗとなる。桁行３間（約4.5m）、梁行２間（約3.3m）の建物跡で、矢印の柱穴の掘り方埋土より土師器皿（１）が出土した。

Ⅳ．遺　　物

今回の調査で出土した遺物は、整理箱にして３箱であった。これらの遺物は、室町時代と江戸時代の２つの時期に大別できる。

以下、特徴的な遺物について概略を述べる。個々の遺物の詳細については遺物観察表を参照されたい。

なお、土師器皿[1]や鍋[2]については、伊藤裕偉氏による編年（以下、伊藤編年）を参考にした。

１．遺構出土の遺物

(1)　室町時代の遺物（15世紀～16世紀前半）

土師器皿（１）

ＳＢ２から出土した。口径７㎝程度の南伊勢系土師器皿のＢ系統に属し、口縁部は横ナデが施され、端部は内湾している。

２．ピット出土の遺物

(1)　室町時代の遺物（15世紀～16世紀前半）

土師器皿（２・４・５）

２は口径６㎝程度の南伊勢系土師器皿のＢ系統に属し、端部はナデ調整されている。４は口径10㎝程度の南伊勢系土師器皿のＣ系統に属し、口縁部は直線的に伸び、横ナデが施されている。５は口径９㎝程度の南伊勢系土師器皿のＣ系統に属し、口縁部は横ナデが施され、端部は内湾している。

土師器鍋（８・９）

８は伊藤編年の第４段階Ｃ形式に属し、口縁部は受口状に直線的に開いており、口縁端部の折り返し部分の断面三角形も平らになっている。16世紀前半と考えられる。９は体部にハケメを施さず、16世紀後半と考えられる。

(2)　江戸時代の遺物

陶器椀（６）

瀬戸登窯の天目茶椀で、内面・外面に鉄釉が施され、17世紀中頃のものと考えられる[3]。

(3)　その他の遺物

小刀（11）

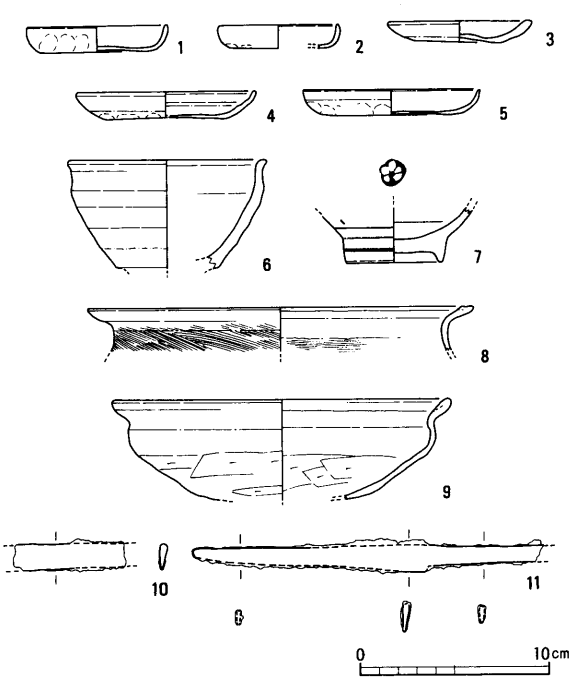
残存長18.6㎝、切先、茎部の端部を欠失している。

３．表採・包含層出土の遺物

(1)　江戸時代の遺物

土師器皿（３）

口縁部に黒い油煙痕があることから、灯明受皿として使われていたと考えられる。口径８㎝程度の南伊勢系土師器皿のＡ系統に属する。



第７図　出土遺物実測図（1:4）

陶器椀（７）

瀬戸産の広東碗で、内面に藍染付があり、19世紀中頃のものと考えられる[④]。

(2) その他の遺物

刀子（10）

残存長5.7㎝、身部片のみである。

図版番号	登録番号	器種	出土位置		計測値(cm)		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
			地区	遺構	口径	器高						
1	001－04	土師器皿	Ｊ１１	ＳＢ２	7.4	1.35	内面ナデ、口縁部ヨコナデ 外面ナデ、外面底部オサエ	やや密 ～1㎝の砂粒含む	並	10YR7/4 浅黄橙	口縁1/4	
2	001－07	土師器皿	Ｊ１０	Ｐ３	6.2	1.25	内面ナデ、外面オサエナデ	密 微砂粒含む	並	10YR8/3 浅黄橙	口縁1/2	
3	001－03	土師器皿	Ａ６	包含層	7.6	1.2	内面ナデ、口縁部ヨコナデ 外面オサエナデ	やや密 微砂粒含む	並	7.5YR8/3 浅黄橙 7.5YR7/1 明褐灰	完存	口縁部に油煙あり
4	001－02	土師器皿	Ｋ１０	Ｐ２	9.5	1.45	内面ナデ、口縁部ヨコナデ 外面オサエナデ、外面底部板目状圧痕	密 ～1㎝の砂粒含む	並	5YR8/3 淡橙 10YR8/4 浅黄橙	口縁2/5	
5	001－05	土師器皿	Ｉ１１	Ｐ１	9.4	1.35	内面ナデ、口縁部ヨコナデ 外面オサエナデ	密 微砂粒含む	並	7.5YR8/3 浅黄橙	口縁1/6	
6	002－01	陶器椀 天目茶椀	Ｋ２	Ｐ２	10.4		内外面ロクロナデ、外面底部ロクロケズリ 施釉	やや密 微砂粒含む	良好	2.5Y8/2 灰白 釉 7.5YR2/1 黒	口縁2/5	17C.中頃鉄釉 瀬戸産
7	001－08	陶器椀 広東碗	表採		底径 5.0		内外面ロクロナデ、内面底部に藍染付けあり 施釉	密	良好	7.5Y7/1 灰白	底部1/2	19C.中頃 瀬戸産
8	001－06	土師器鍋	Ｋ１０	Ｐ１	20.6		内面ナデ、ヨコハケメ、口縁部ヨコナデ 外面ハケメ	やや密 ～1㎝の砂粒含む	並	10YR8/3 浅黄橙	口縁1/4	
9	001－01	土師器鍋	Ｋ１０	Ｐ２	18.0		内面ケズリ、口縁部ヨコナデ 外面ナデ、ケズリ、オサエ	密 ～1㎝の砂粒含む	並	5YR8/3 淡橙、5YR7/3 にぶい橙、10YR8/3 浅黄橙	口縁1/3	
10	002－02	鉄製品 刀子	Ｈ１４	包含層	残存長 5.7		鍛造：断面二等辺三角形			材質：鉄	身部片のみ	
11	002－03	鉄製品 小刀	Ｋ２	Ｐ１	残存長 18.6		鍛造：断面二等辺三角形			材質：鉄	切先、 茎部欠失	

第１表　出土遺物観察表

Ｖ．結　　語

今回の調査において、住居跡に関する遺構は、ＳＢ１・ＳＢ２の２棟だけで、集落に結ぶつくものまでは検出でなかった。ＳＢ１・２は、掘り方埋土より出土した土器より15世紀から16世紀前半の時期と考えられる。

この建物跡から東方には遺構が見られず、地形が一之瀬川にむかって低くなっていく事から、調査区は遺跡の縁辺部にあたると考えられる。

当遺跡の中心部については、現在の五ケ町の集落がある西方に存在する可能性が高い。

今後、当調査区の周辺の調査がすすみ集落跡が発見されることを期待したい。

〔註〕

① 伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1993年）。

② 伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」（『Mie history』vol. 1、三重歴史文化研究会、1990年）。

伊藤裕偉「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」（『鍋と甕そのデザイン』、東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会、1996年）。

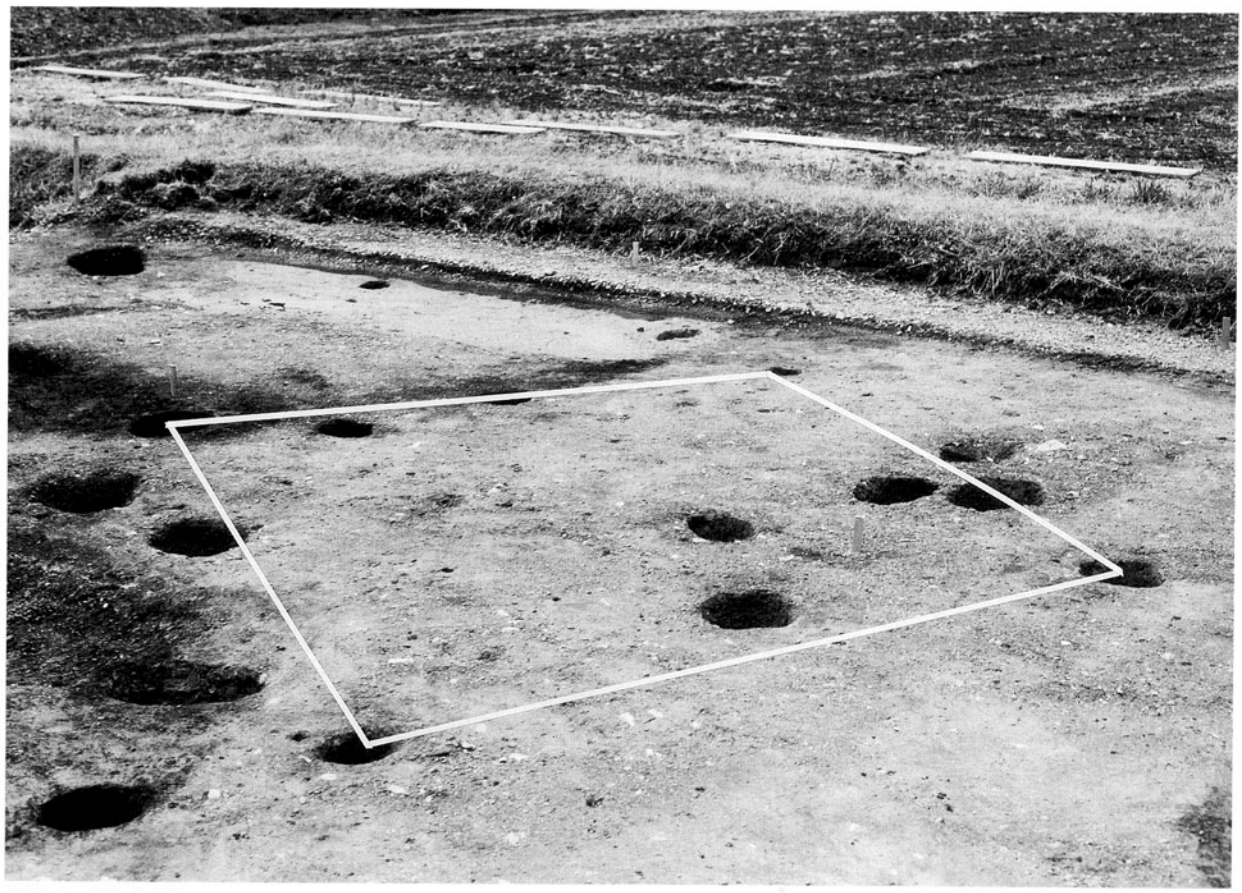
③ 藤澤良祐「本業焼の研究(2)―赤津村・上水野村を中心に―」（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅶ、瀬戸市歴史民俗資料館、1988年）。

藤澤良祐「本業焼の研究(3)―下品野村・下半田川村を中心に―」（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅷ、瀬戸市歴史民俗資料館、1989年）。

④ 前掲③と同じ。

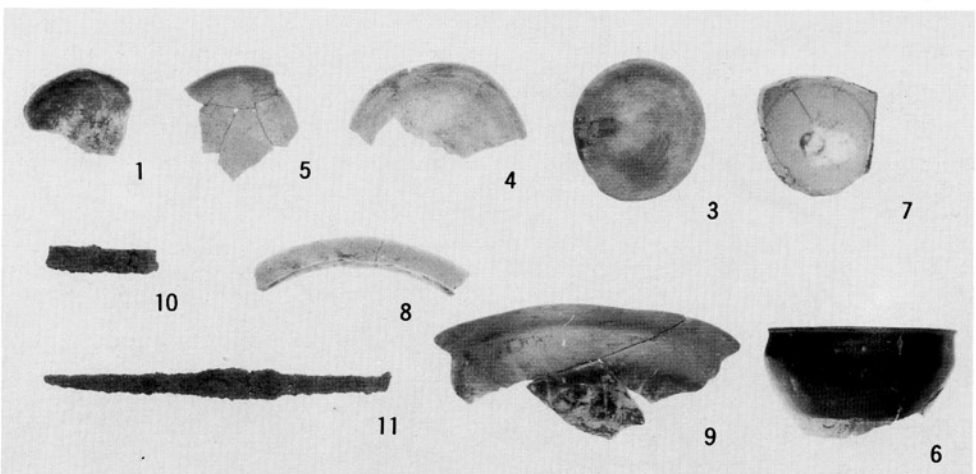
図版１

調査区全景（西から）



ＳＢ１（北から）

ＳＢ２（西から）

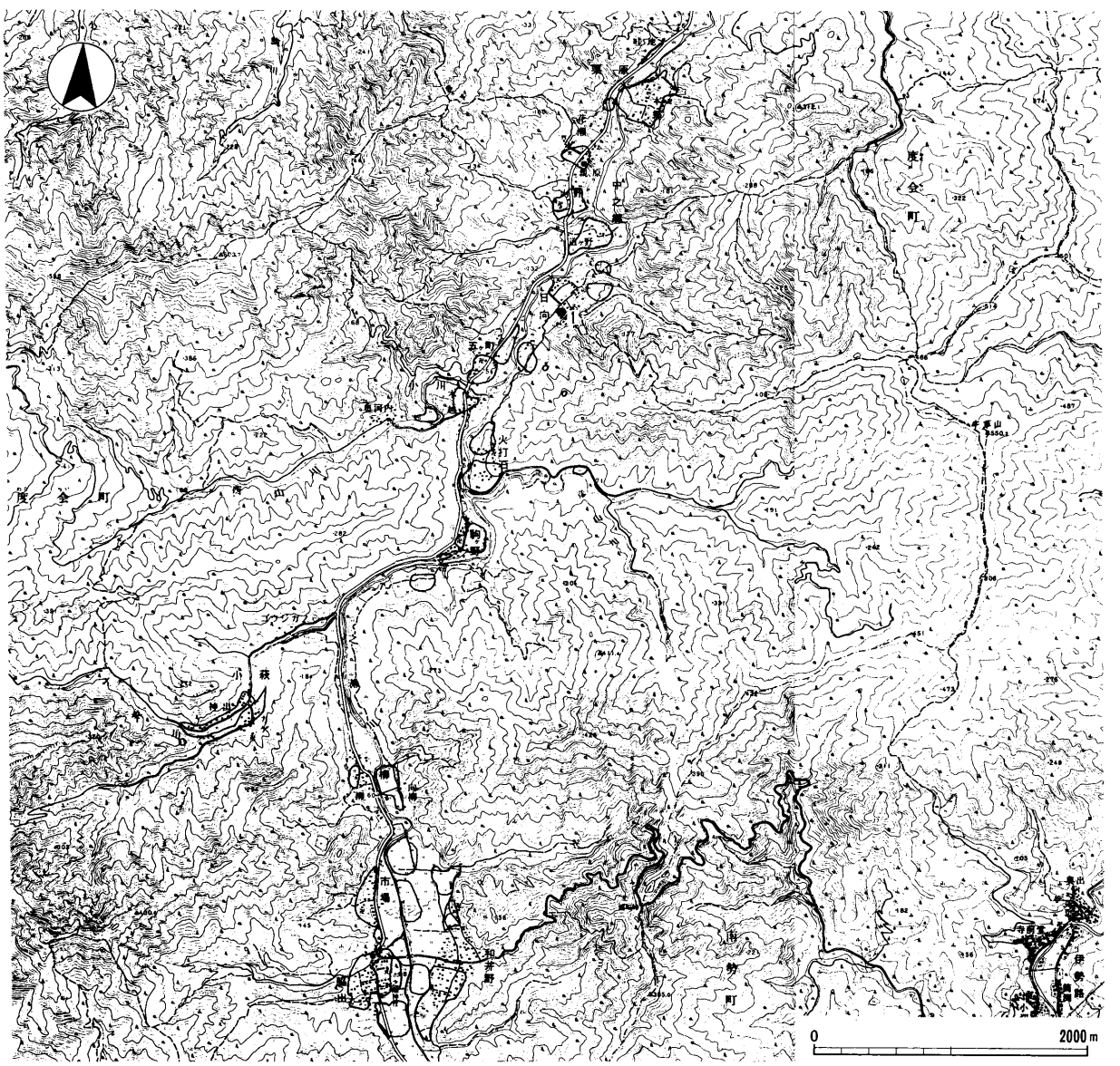


出土遺物（1:3）

度会郡度会町日向　日向長通り遺跡

Ⅰ．前　　言

今回の発掘調査は、平成９年度県営中山間地域総合整備事業（小川郷上地区）に伴い実施された。日向長通り遺跡（１）は、度会郡度会町日向字長通りに所在し、一之瀬川下流右岸の河岸段丘上に立地する。標高は約50mで、現況は水田である。平成８年の皇學館大學考古学研究会の分布調査によって発見された[1]。調査に先立ち平成９年10月に試掘調査を実施した。その結果、事業予定地の約250m²については遺跡が存在する事が確認された。事業に先立ち削平される部分について立ち会い調査を実施した。

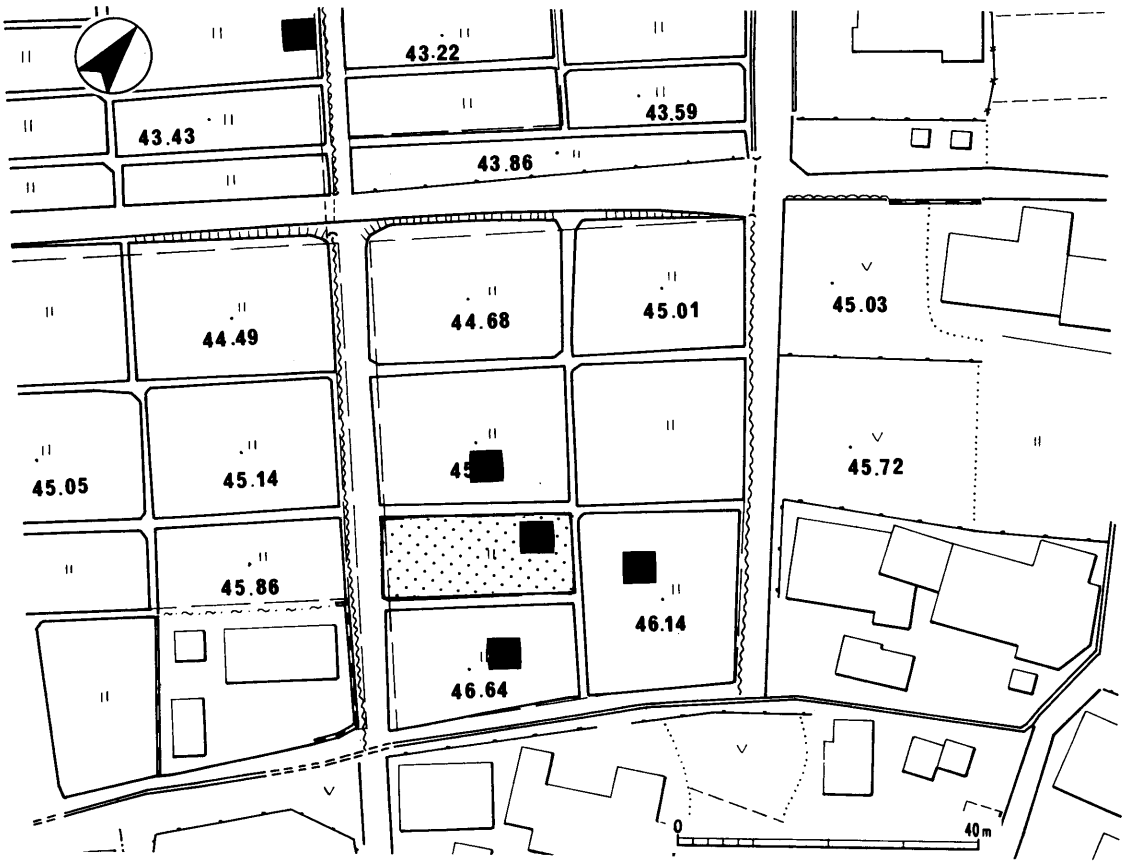


第８図　遺跡位置図（1:50,000、国土地理院『脇出』『五ヵ所浦』1:25,000から）

また、調査区の南西部については、開墾時に攪乱されていると考えたため、調査は実施しなかった。

調査期間は平成10年１月７日～１月14日で、調査面積は250m²である。

なお、日向長通り遺跡の歴史的環境については、本報告書所収の「久七屋敷遺跡」の報文を参照されたい[2]。



第９図　調査区位置図（1:1,000）〔■試掘坑〕

II．層位と遺構

１．層　　位

基本層序は、上より第１層：黒褐色土（耕作土）、第２層：暗褐色砂礫土（地山）となる。遺構検出面は第２層上面である。

２．遺　　構

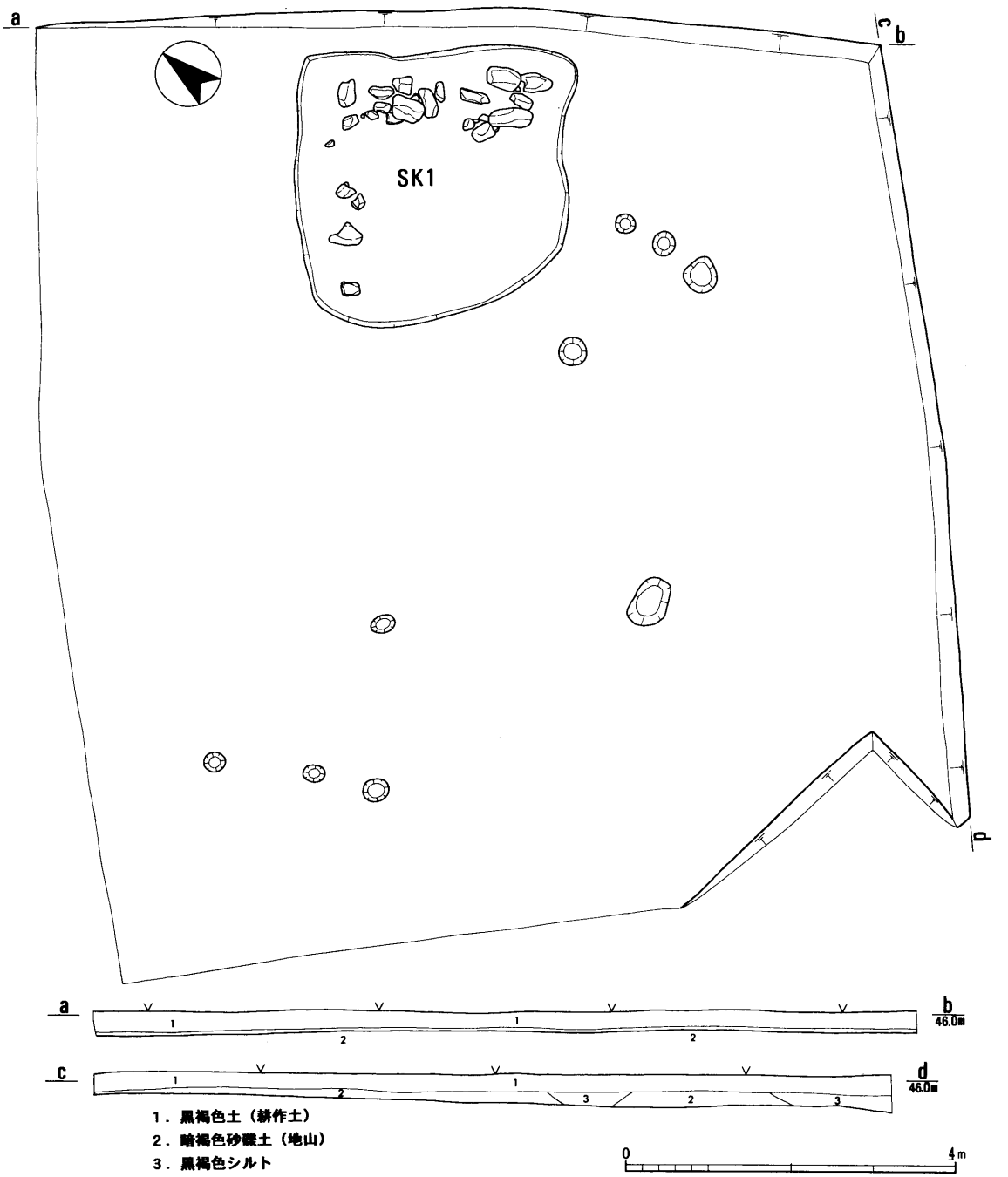
当遺跡では、土坑１基を検出した。

(1)　室町時代後期の遺構（16世紀前半）

(ア)　土坑

ＳＫ１（第11図）

調査区の北東の中央部で検出した。長径約3.3m、短径約3.2mで、長さ約0.4m、幅約0.3mの石が土坑の北東に並んでいる。埋土は黒褐色粘質土で、土師器皿や鍋・十能の小片が出土した。

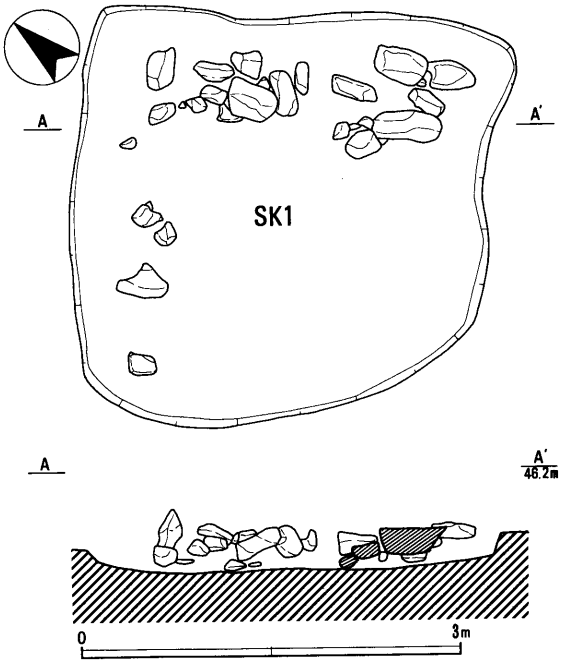


第10図　遺構平面図（1:80）及び調査区土層断面図（1:80）

Ⅲ．遺　　物

今回の調査で出土した遺物は、整理箱にして１箱であった。これらの遺物は、室町時代後期（16世紀前半）の時期と考えられる。

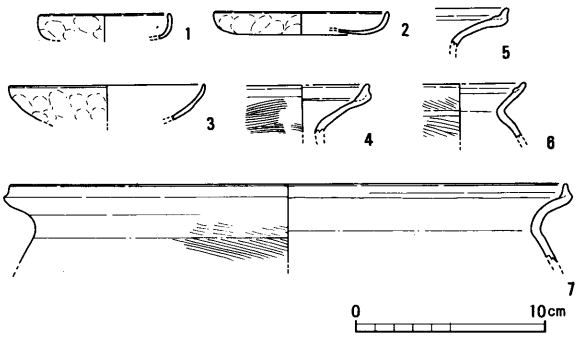
以下、特徴的な遺物について概略を述べる。個々



第11図　ＳＫ１実測図（1:60）

の遺物の詳細については遺物観察表を参照されたい。

なお、土師器皿[3]や鍋[4]については伊藤裕偉氏による編年（以下、伊藤編年）を参考にした。



第12図　出土遺物実測図（1:4）

１．遺構出土の遺物

(1)　室町時代の遺物

土師器皿（１・２・３）

１は南伊勢系土師器皿のＢ系統、２はＣ系統、３はＤ系統に属する。全てＳＫ１から出土した。

土師器鍋（４・５・６・７）

４・５は口縁部に煤が付着している。伊藤編年の第４段階ｃ型式に当たる。６は伊藤編年の第４段階ｂ型式に当たる。７は伊藤編年の第４段階ｄ型式に当たる。全てＳＫ１から出土した。

図版番号	登録番号	器種	出土位置		計測値(cm)		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
			地区	遺構	口径	器高						
1	001－07	土師器皿	Ａ２	ＳＫ１	6.8		内面ナデ、外面オサエナデ	密 微砂粒含む	並	7.5YR8/3 浅黄橙	口縁1/5	
2	001－06	土師器皿	Ａ２	ＳＫ１	9.2	1.2	内面ナデ、外面オサエ	密 微砂粒含む	並	10YR8/3　浅黄橙	口縁1/6	
3	001－05	土師器皿	Ａ２	ＳＫ１	10.4		内面ナデ、口縁部ヨコナデ 外面オサエ	密 微砂粒含む	並	7.5YR8/3 浅黄橙	口縁1/3	
4	001－03	土師器鍋	Ａ２	ＳＫ１			内面～口縁部ヨコナデ 外面ヨコハケ	密 微砂粒含む	並	10YR8/3　浅黄橙	口縁部片	口縁部に煤付着
5	001－02	土師器鍋	Ａ２	ＳＫ１			内面～外面ヨコナデ	密 微砂粒含む	並	10YR8/3　浅黄橙	口縁部片	口縁部に煤付着
6	001－04	土師器鍋	Ａ２	ＳＫ１			内面ナデ、口縁部ヨコナデ 外面ヨコハケ	密 微砂粒含む	並	7.5YR7/3　にぶい橙	口縁部片	
7	001－01	土師器鍋	Ａ２	ＳＫ１	29.6		内面ナデ、口縁部ヨコナデ 外面ヨコハケ	密 ～1mmの砂粒含む	並	7.5YR8/3 浅黄橙	口縁1/10	

第２表　出土遺物観察表

Ⅳ．結　　語

今回の調査では、土坑１基を検出したのみであった。この土坑には石囲いが残っており、土師器皿や鍋が出土している。石囲いについては、開墾により一部破壊されていた可能性も考えられる。土坑の性格的位置づけは、明らかにすることができなかった。調査区の周辺については、試掘の結果、遺構・遺物包含層とも認められず、遺跡の縁辺部に位置すると思われる。しかし、当調査区の南方に番場城跡などが存在することから、現在の日向集落がある東方に中世を中心とした遺跡が、広がっている可能性が考えられる。

〔註〕

① 皇學館大學考古学研究会編『一之瀬川流域の遺跡』（皇學館大學考古学研究会、1996年）。

上記の文献では「日向遺跡」と報告されているが、今回の調査に当たり調査区の字名をとり、「日向長通り遺跡」と改称した。

② 拙稿「久七屋敷遺跡」（『久七屋敷遺跡・日向長通り遺跡』、三重県埋蔵文化財センター、1999年）。

③ 伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1993年）。

④ 伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」（『Mie history』 vol. 1、三重歴史文化研究会、1990年）。

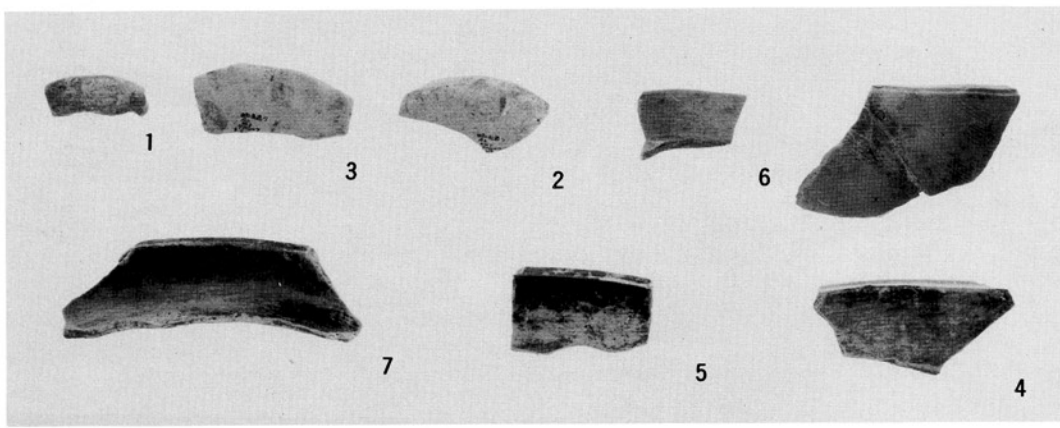
伊藤裕偉「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」（『鍋と甕そのデザイン』、東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会、1996年）。

調査区全景（東から）

ＳＫ１（東から）

図版 4

作業風景（南東から）



出土遺物（1:3）

報 告 書 抄 録

ふりがな	きゅうひちやしきいせき　ひなたながどおりいせき
書名	久七屋敷遺跡・日向長通り遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	１６６－４
編著者名	奥野　実
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515－0325　三重県多気郡明和町竹川503　TEL 0596－52－1732
発行年月日	西暦1999年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
きゅうひちやしきいせき 久七屋敷遺跡	みえけん わたらいぐん 三重県 度会郡 わたらいちょうごかのちょう 度会町五ケ町 あざきゅうひちやしき 字久七屋敷	市町村 24470 遺跡番号	34° 23′ 20″	136° 36′ 05″	19971117 ～ 19980116	1,500㎡	平成９年度県営中山間地域総合整備事業（小川郷上地区）
ひなたながどおりいせき 日向長通り遺跡	みえけん わたらいぐん 三重県 度会郡 わたらいちょうひなたあざ 度会町日向字 ながどお 長通り	市町村 24470 遺跡番号	34° 23′ 30″	136° 36′ 40″	19980107 ～ 19980114	250㎡	平成9年度県営中山間地域総合整備事業（小川郷上地区）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
久七屋敷遺影	集落跡	室町時代	掘立柱建物	土師器皿・鍋、陶器椀 小刀、刀子	
日向長通り遺跡	集落跡	室町時代	土坑	土師器皿・鍋	

平成11(1999)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年8月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告166－4

久七屋敷遺跡・日向長通り遺跡
— 三重県度会郡度会町所在 —

1999年 3 月

編　集
発　行　三重県埋蔵文化財センター

印　刷　有限会社第一プリント社